

## 森川俊夫名誉教授年譜

一九三〇年

一月七日、森川肇の次男として東京に生まれる。

一九三二年

二月、母一枝(旧姓藤田)病没。十一月以降継母澄子(旧姓水野)に育てられる。

一九三六年

二・二六事件の発生したこの年、目黒区大岡山小学校に入学。

一九四二年

四月、芝区(現港区)の私立正則中学校に入学。前年の一二月八日、太平洋戦争が勃発していたが、中学生の身にはそれ以前の日中戦争期と、社会情勢にさしたる変化は感じられなかった。

一九四四年

四月、单身四国松山の継母の縁戚の家に疎開、私立新田中学校に転校したが、父母が疎開を断念したため、一二月帰京、正則中学に復帰する。この頃以降米軍の空爆が頻度を増し、加えて勤労働員のため、勉学の機会は一九四五年八月一五日まで完全に失われる。

一九四七年

三月、正則中学校を卒業、四月、水戸高等学校文科乙類に入学。当初、茨城県友部町の旧海軍飛行場跡の兵舎が教室、寄宿舎として利用されていたが、翌四八年には水戸の旧キャンパスのバラック校舎に移る。

一九五〇年

三月、水戸高等学校を卒業、四月、東京大学文学部独語独文学科に入学。六月二五日、朝鮮戦争が勃発。それ以前から対日政策を一八〇度転換して日本に再武装を要求しだしたGHQ、あるいはアメリカに対して不信感を覚える。この頃、洋書輸入が自由化され、トーマス・マンの『ファウストゥス博士』を入手。この秋、「アメリカ在住のトーマス・マンが平和運動から手を引くと声明した」という簡単な新聞報道に接してマンに質問の手紙を送ったところ、五一年四月初め返書が届く。この三月二〇日付の書簡は後に全集に収録される。

一九五三年

三月、文学部独文科を旧制最後の学生として卒業、卒業論文では前記『ファウストゥス博士』の複雑な構成とその意味を考究する。

四月、熊本大学法文学部に助手として赴任、ドイツ語の授業を担当する。

一九五四年

四月、東京大学文学部助手として独文科に戻り、立教大学に非常勤講師として出講、その後今日に至るまで、慶応大学、成蹊大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、山口大学、桐朋学園短大音楽部などに短期、あるいは長期間出講、現在は中央大学、成城大学で非常勤講師を勤めている。

一九五五年

この年佐藤晃一助教授に協力して、ヒトラー政権下のドイツ国内における抵抗運動の記録をまとめたギュンター・ヴァイゼンボルの『声なき蜂起』を訳出する。

一九五七年

四月、電気通信大学に外向、専任講師。また非常勤講師として一橋大学小平分校に出講する。

一九六〇年

電気通信大学での最後の年に、いわゆる六〇年安保のうねりが、それまで政治的に無反応だったこの理科系の大学をも大きく動かす。

一九六一年

四月、これまで非常勤講師としてかかわってきた一橋大学に専任講師として移り、法学部に所属する。八月一三日ベルリンの壁が構築されるが、その十日後、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の給費を受けてドイツへ出張、テュービンゲン大学で四学期二年を過ごし、最後の二学期は文学研究のかたわら、日本語初級の講師を勤める。

一九六三年

二月、ベルリンでロルフ・ホーホフートの『神の代理人』が上演される。この作品がヨーロッパ・キリスト教世界にまさおこした激しい反応に触発されて、この作品の翻訳紹介を思い立つ。(六四年刊行)。八月末帰国。

一九六五年

四月、助教昇任。

一九六九年

この頃の大学の混乱、いわゆる大学紛争はまったく成果を残さなかったという意味で途方もないエネルギーと時間の浪費であったが、われわれの意識の底には貴重な痕跡を残している。

一九七一年

八月、教授昇任。

一九七五年

一〇月、ルートヴィヒスブルクにおける『現代ドイツ文学についてのシンポジウム』に参加。

一九八三年

三月、ドイツ民主共和国南部を旅行して、これまで東ベルリンしか見ていなかった東独の実情に接する。

一九八五年

七月から九月にかけての二カ月、如水会の援助を得てドイツ連邦共和国、オーストリア、スイスを巡

一九八七年

り、独日友好委員会の招待を受けて、東独における「ドイツ農民戦争」の資料に触れ、史跡を見学する。

三月下旬から四月初めにかけて、ヴァイマルでの「現代ドイツ文学コロキウム」に参加する。

一九九〇年

二月から三月にかけて二週間、ベルリンの壁が崩れかけた時点での東西ドイツの状況に触れる。

一九九二年

三月三十一日、一橋大学退官。

四月、一橋大学名誉教授。東京国際大学教授に任じられる。